

## 初代所長日高先生の理想主義と情熱

讃岐 和家

国際基督教大学（ICU）の教育研究所は、1953年3月、日高第四郎先生によって設立された。以後35年間の歩みの中であって研究所は多くの成果をあげ、多数の優秀な人材を世に送り出してきたが、この歩みを方向づけ、指導してきた研究所の原点は、初代所長であり、定年退職されるまで13年間にわたって研究所の活動を指導された日高第四郎先生の理想主義と情熱であったと思う。研究所設立35周年を記念するに当たって、先生のご業績とお人柄を偲び、今後の課題を思いみるよすがとしてみたい。

私が日高第四郎先生にはじめてお目にかかったのは、教育研究所の助手採用の面接の日であった。それは1954年1月下旬のある日であったように思う。前年の暮に指導教授であった金子武蔵教授から「ICUの日高教授が助手を求めておられる。大変よい仕事と思うので履歴書をお送りし面接を受けてみるように」というお話があって、1月に入ってICUのオフィスに日高先生をお訪ねしたのであった。前夜に降り積った雪が晴れ上がった空から降り注ぐ陽光をまぶしく反射している日であった。本館101号室の先生のオフィスに入ると、にこやかな笑顔で迎え入れて下さり、不安と緊張も幾分とけて、これまでやってきたこと、これからやりたいと思っていることとお話できたように思う。先生は、前年に設立された教育研究所の趣旨と計画を手短かに話され、ことに新しい時代と社会に要請される教育哲学の樹立の計画を説明された。しばらくの間の面接がすむと、本館2階の教務副学長トロイ

ヤー教授の下に連れて行かれ、今度はトロイヤー教授から面接試験を受けたが、その間、日高先生が通訳の労をとって下さり、大変恐縮した。その内容は、哲学と教育問題との関わりといった問題についてであって、答の方はかなり心もとないものであったが、面接の結果は「まあよろしい」ということであったらしい。

1954年の4月から私は教育研究所の教育哲学研究室助手として勤務することになった。その時以来、日高先生とは、はじめは教育哲学研究室の助手として、次には大学院教育学研究科設立のための行政補佐員として、また先生が学生問題担当の副学長となられた後は学生部の行政補佐員として先生の仕事を手伝わせて頂いた。その間、公私ともに一方ならぬご指導とご鞭撻を頂いたことを今も深く感謝している。

日高先生は1896年（明治29年）2月16日、宮内省祐筆であられた父君日高秩父の四男として東京にお生まれになり、長じて学習院初等科および中等科を経て、旧制第一高等学校に進まれ、ついで京都帝国大学文学部で哲学を専攻された。哲学科ではカント倫理学を学ばれたようである。先生は、時として幼少時の経験をお話しされたが、それによると、幼時は大変身体が弱かった。しかし、父君の鍛練および乃木希典が院長時代の学習院での訓練によって、このように長生きできることになったとのことであった。ことに乃木院長については心底から私淑しておられて、質実剛健を旨とする乃木院長の教えは折りにふれて紹介されたものであった。いつか手帳の中から乃木院長の教えのコピーを取り出されて見せて下さったことを覚えている。大学時代のご経験については、西田幾多郎教授のお宅に訪問された折のお話を何回かうかがった。「そんな時は、西田先生の哲学は難しいので、小鳥の話をよくしたものです」といったお話もあった。西田幾多郎も小鳥が好きだった由である。

1922年に京大を卒業された日高先生は、直ちに明治学院高等部に奉職し、1926年までここで哲学を講義しておられた。この間、1922年の12月に、中

渋谷教会の森明牧師から洗礼を受けられ、その後一貫してキリスト教信仰の道を歩み続けられた。ある時、「内村先生の信仰は激しくて私にはついてゆけなかった。」と話されたのを私は記憶している。日高先生の信仰は、カール・ヒルティの信仰のように、素直で合理主義でヒューマニスティックな信仰であったと思う。

1926年に先生は広島高等学校の教授になられて、1934年までの8年間、哲学概論を担当された。広島高等学校では、学校の管理上で不条理な問題があったようで、その問題について直言されたために行政当局者と対立して、ここを辞職されたとのことである。先生は明るく穏やかな人格の中にも凜として物事のけじめをはっきりさせずにはおかない潔癖さを持ち続けられた方であった。「『吞舟の魚、日高を逃すな』と言われて、私は追われたのですよ。しかし、あの問題がなくて広島に居続けたら、原爆で爆死していたでしょうね」と笑いながら話されたのも印象的であった。新約聖書ヤコブ書5章12節に「『しかり』を『しかり』とし、『否』を『否』としなさい」とあるが、先生はこの数えを忠実に守られた方であったと思う。先生は、いわゆる然諾を重んずる人であり、一貫性を守る方であった。ある時、命じられていた仕事を「やれません」と申し上げたところ、「だって、君はやると約束したでしょう。約束は守らなければなりません。」と叱られて、冷汗がでたことを覚えている。にこやかな笑みをたやさず、ユーモアにあふれたお話をよくされたが、時として雷を落されることもあった。「怒った時の先生は水爆みたいだ」と評するものもあった。しかし翌日あたりに「怒ってごめんね」と小さな声で詫びられるのが常だった。

先生は広島を去られた2年後の1935年から37年までは、京都の第三高等学校に奉職され、生徒主事兼教授として学生指導および倫理学を担当され、ついで37年から43年までは京都帝国大学において学生主事（後に学生課長）として学生指導を担当された。その当時、特高に追われた共産党員の学生をかくまっておられたこともある由であった。ICUの教育研究所の計画のひとつに「大学生の補導問題の調査」をあげられたのは、この頃のご経験によ

るものであろう。1943年から敗戦後の46年までの間、先生は第一高等学校に奉職され、第2次大戦の末期から敗戦後の窮乏と混乱の時期に教授兼教頭、後には校長事務取扱として極めて困難な校務の処理に当たられた。

1946年から49年までの3年間、すなわちわが国の敗戦後の窮乏と混乱、社会の激動と大変革の時期に、しかも占領軍の統治下という異常な状況の下にあって、先生は「行政と法制の知識もないのに」文部省学務局長の仕事を引き受けられ、教育基本法および学校教育法の制定および6・3・3制学校体系の導入を中心とするわが国教育の抜本的改革の行政上の責任者としての職責を果された。終戦の詔勅をきいた当日、先生はひそかに「戦争は終わったけれども新しい再建の戦争が始まるのだ。そのときには私も遅ればせ乍ら一兵卒になってできることなら何でもしよう。」と祈った、と書かれている。また、「幾多の青年・学生を戦場に送った者の責任を自ら負おう」と決意した、とも話されている。全く不慣れで、いわば火中の栗を拾う拳にも似た教育行政の実務への転職は、このような祈りと決意に支えられたものであった。激烈なインフレの進行の下で実施を指令する連合軍司令部の係官との接衝、国会での反対への対処、日教組のしつこい陳情への対応などのきびしさは察するに余りあることであった。このような状況の下にあって、親しく接した4人の思想家、学者、教育家を兼ねる大先輩から「危機に臨んで向うべき方針と実践的勇氣忍耐」を教えられたことを感謝した、と先生は書いておられる。4人の中の3人は、田中耕太郎、森戸辰男、天野貞祐の諸氏であるが、もうひとりには安倍能成氏であろう。

ICUの設立計画案は敗戦直後の1945年の9月に開催された東京女子大学の理事会に生まれたが、その後急速に具体化が進み、1948年には「国際基督教大学研究所」の設立、「学校法人国際基督教学園」の認可、および「国際基督教大学建設後援会」の設立をみた。日高先生は1948年に「建設後援会」の評議員となられた。これが先生のICUとの関わりのはじめであろう。ついで、1949年6月13日から15日まで御殿場で行われたICU創立のための「御殿場会議」にも参加された。その意味においても、先生はICU創設者

のひとりである。

1949年から51年までの2年間、国立教育研究所長をつとめられた後、51年から52年秋まで、先生は天野貞祐文部大臣の下で文部事務次官をつとめられた。52年秋の次官退任に当たって、「多くの魅力的な招聘の口をことわって」（C.W.アイグルハート，“International Christian University” p.128）ICUに教授として奉職することを決意された。このことには、湯浅八郎学長とトロイヤー副学長の熱心な懇請も与って効力があったようである。「日本が曲がりなりにも政治的独立を回復した後、1952年秋以来、私は深く期するところあって、国際基督教大学の設立の為に応分の努力をささげて来た。摂理を仰ぎつつ、真理と人道とを希求する新しい教育実験の場として、この大学が日本の文化的土壌に深く精神の根をおろして行くよう、ひそかに祈願をこめて。」定年によるご退職を前にして出版された先生の論文集『民主教育の回顧と展開』序のこの言葉には先生のICUへの深い思い入れがこめられている。1952年10月1日、先生はICUに着任された。

ICUに来られた先生はおそらくは数か月の想いを練られた上で1953年3月に教育研究所を設立された。その趣旨と計画は1955年5月に刊行された「ICU教育研究」第1号の巻頭言に詳しく述べられている。研究所設立の趣旨としてあげられているものは、1) 民主主義の確立と教育、2) 新教育の基本原則、3) 学制改革の難点、4) 教師養成の問題、5) ICUの教育の大学院計画、6) 大学院と教育研究所、の6項目である。ここに述べられていることを要約するならば、敗戦後の大きな社会改革を経て成立した民主主義が日本の社会に根を下ろすためには、新しい教育が必要であり、そのためには新しい教育の諸原理を理解し修得した教師の養成が必要であり、そのための教育学大学院の設置がICUに期待されている。やがて設直されるICUの大学院は、①研究機関としての機能、②教育機関としての機能、および③専門分野における奉仕機関としての機能が具備されなければならないが、このうち第1と第3の機能を果すものがICUの教育研究所である、というものである。

1949年6月の御殿場会議で議決されたICUの構想は、一般教養に重点をおいた教養学部の上に、教育学、行政学、社会事業の3つの大学院（現在の学校教育法の用語で言えば、大学院の研究科）をもつ大学であった。日高先生の教育研究所の構想は、このうちの「教育学大学院」に関わるものであった。

教育研究所の研究課題として、日高先生は次の6つの課題をあげられた。

- A. 教育哲学の研究
- B. 教育におけるキリスト教原理の研究
- C. 国際理解の教育の調査研究
- D. 教育心理学および教育社会学の研究
- E. 視聴覚教育の研究および実験
- F. 大学生の補導問題の調査

これらの課題は、いずれも時誼を得た適切なものであり、かつ先生ご自身の直接体験に基づき必要と認められた課題であったように思われる。

1953年発足当時の所員は日高先生以下小島軍造、関屋光彦、秋田稔、長（武田）清子、高木とり、西本三十二、守谷英次（敬称略）の総勢8名であり、1954年に私と他に視聴覚教育部門の助手2名（杉山貞夫と上林二郎）の3名が加わった。他に技術員と書記員が各1名いた。同年7月にウェンガー教授が所員に加わった。教育研究所は、当時唯一の大きな建物であった本館の101号室と102号室におかれ、毎週1度（と思うが、隔週であったかもしれない）所員会議があって、各部門の研究報告があった。所員会議には、トローイヤー教授も顧問として毎回出席しておられた。とくに教育哲学部門の仕事で大きかったものは、「民主主義教育の哲学的基礎づけ」のプロジェクトである。これは小島軍造先生を中心として、年に数回「綱要」をつくり、これを著名な学識経験者十数人から成る「反響委員会」に提示して意見を述べてもらい、次第に肉付けしていき、2年程経った時点で小・中・高校の現職の教員に検討してもらい、というプロジェクトで、完成したテキストを印刷刊行した1959年末まで続けられた。

教育研究所の初期における奉仕活動としては、「万人の糧」と題する教育関係資料集シリーズの刊行とエミール・ブルンナー教授による公開講座“Justice and Freedom in Society”が印象に残っている。「万人の糧」に収められたリンカーンの「ゲティスバーグ演説」は、日高先生の愛誦されたもので、先生は中学時代に覚えられたその全文の暗誦を時折り私たちにしてみせられて驚ろかされたものであった。ブルンナー教授は1953年から2年間ICUに来ておられて学生に大きな感銘を与えたが、日高先生はブルンナー教授と意気投合されて、公開講座の他にもブルンナー教授を講師とする会合（名称は「ブルンネン会」）を何回か催されたように記憶する。

学外にあっても日高先生は精力的な活動家であって、蠟山政道先生たちと「民主教育協会」を作り、その普及部長をつとめておられ、またご自宅を会場として「一心会」という会を作られ、著名な講師を招いての懇談会を開催しておられた。野鳥が好きであった先生は「小鳥の友の会」なる組織を作り、この会の探鳥会をICUの森で開かれたことがあった。

1955年に入ると教養学部には3期生が入学し、翌年度は学部教育も完成年度に入るので、念願の教育学大学院の設置が可能になるはずだ、との想定で大学院設置申請の業務を日高先生は開始された。東京教育大学をはじめ幾つかの大学の大学院教育学研究科の資料を集めて研究科のカリキュラムを作成したが、大変だったのは申請書類の作成（守谷教授がチーフ）であった。申請書提出の〆切日は当時11月の30日だったが、9月頃から書類作りをはじめ、11月に入ると毎晩夜半過ぎまで助手たちと書記員が作業し、提出日の前夜は徹夜して完成にこぎつけた。タイプは当時は図書館に所属していた岩田みよさんに頼んだ。コピー機械もなく、ワープロも勿論ない時代に、手許の控えを含めて7部の申請書類を作る作業は実に大変であった。私たちが作業をしている傍らで日高先生は終るまで見守っておられた。ある時、だれかが「行政当局はぼくたちの仕事をどう思っているんだろうね」と不平をもらしたところ、突然日高先生の姿が見えなくなり、しばらくして学長の湯浅先生と一緒に帰ってこられた。「君たち、こんなに遅くまでごくろうさん。ほん

とうにありがとう」と湯浅先生に声をかけられて一同が大変とまどったことを思い出す。日高先生はいつも部下思いであった。

そのようにして作成した申請書類も、学部のほんとうの完成年度は最初の卒業生を出した年の次の年度であるという理由で取り下げになり、申請は翌1956年度までお預けとなった。この年度には私がチーフで、視聴覚研究室の助手2人が中野照海助手と栗原敦夫助手の2人に代り、また教育心理学研究室に岡部彌太郎教授が着任された。この年の認可申請については、大学院教育学研究科に対応する教育学部が存在しないことが大きな問題となった由であるが、おそらくは日高先生のねばり強い交渉で、ICU大学院教育学研究科の設置は認可され、1957年4月に最初の院生が入学した。ただし、教育哲学専修分野と理科教育法専修分野はこの年は認可されず、この両分野が認可されたのは、教育哲学研究室に小林澄兄教授と、理科教育法研究室に山岡望教授を迎えることにした1958年度からである。この年度をもって現在の形の大学院教育学研究科は完成し、教育研究所と合せて両者は草創期を過ぎてその後順調な発展をとげ今に至っている。日高先生のご尽力がなければ、ICUの大学院はありえなかったと私は思う。その意味においても、先生のICUへのご貢献は絶大なものであった。

大学院教育学研究科の発足とともに日高先生は定年退職される1965年度まで大学院部長をつとめられ、1962年から65年までは学生指導副学長であった。65年には名誉学位と名誉教授の称号を受けられた。ご退職後は1975年まで大学院の客員教授として教育哲学の講義を続けられ、他方、学校法人国際基督教大学の理事、78年度から設置されたICU高校の設置委員会委員長としてICUに奉仕された。また、学外にあっては、66年から68年までは学習院次長兼学習院女子短期大学学長をつとめ、教育課程審議会委員、ユネスコ国内委員会等の委員を歴任される等、休むことなくわが国の教育の発展に貢献されたが、1976年1月に肺炎で病床につかれた後、約2年間の入院加療も甲斐なく、77年12月14日、天に召された。



大学院での授業で先生がよく使われたテキストのひとつは、人間を自己超越動物ととらえて教育を理解するロバート・ウーリッヒの“Human Career”であり、もうひとつは田中耕太郎の『教育基本法の解説』であったように思う。このことと『教育改革への道』（1954年）ほか3冊のご著書からうかがわれる先生の学風は、キリスト教の精神とカントに代表される理想主義の哲学に基づく教育哲学であり、「日本人が作った」といつも先生が強調された教育基本法に示される教育思想を骨子とするものであった。

福音の信仰と理想主義的ヒューマニズムの思想を内に秘めた先生は高い理想に向って努力してやまない人柄であり、熱烈な情熱をもって課題と取り組む人柄であり、明治の人らしく立居振舞はいつも端正であった。強い信念をもちつつ謙虚で包擁力に富む人柄であった。明治天皇の御祐筆であった父君の血を受けて、先生の字はよく整った美しい字であった。いつか「一枚色紙を書いて下さい」とお願いしたところ、書いて下さったのは「わずかなる庭の小草の白露を、求めてやどる秋の夜の月」という歌であった。先生のお人柄をよく示している書であると思っている。

先生が教育研究所設立に当たって建てられた研究課題は少しく様相を変えつつも今もなお変らない研究課題である。経済大国となったと言われる現代のわが国の教育は、初等・中等教育のレベルにおいては世界各国の教育改革のモデルと評価されるほどに充実したが、高等教育には改革されるべき課題は実に多い。受験体制の問題、学歴信卸の問題等、わが国の教育問題の多くは高等教育の問題に由来するとみることでもできよう。情報化社会への対応、生涯教育への対応、日本語教育なども新しい教育課題である。先生のかかげられた課題に併せて、これらの新しい研究課題と取り組んでゆくことが今後のICUの教育研究所と大学院教育学研究科の課題であろう。（本学教授）